

---

# 恋愛しよう その2

青木弘樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛しよう その2

### 【Nコード】

N8184K

### 【作者名】

青木弘樹

### 【あらすじ】

恋愛に縁のない寂しい人生を送っている主人公、堤たけし。勤めていた工場も潰れてしまって、現在フリーター。さまざまな出会いはあるものの、なかなかうまくはいかない。果たして彼は最終的に幸せを手にすることが出来るのか…。

作：青木弘樹

二日後。

たけしはロイヤルレストランに来た。

「いらつしゃいませ。一名様ですか？」

「いえ、実は友人が来てまして、いるはずなんですが…」

たけしはあたりを見渡した。

「あつ」

たけしは相沢ようこを見つけた。

「あつ」

むこうもたけしに気づいたようだった。

「たけし君、こっち」

「あの、いいですか？」

「はい、どうぞ」

店員は状況を把握し、笑顔でたけしを誘導した。

「では、ご注文が決まりましたら、そのインターホンでお呼びください」

「ありがとうございます」

たけしは席に座った。

「久しぶり、たけし君」

「そうだね、相沢さん」

たけしは相沢に見とれていた。昔からかわいかったが、大人っぽくなり、ますますきれいになっていった。30歳にも見えなかった。

「ごめんね。急に連絡したりして」

「いや全然大丈夫だよ。それにしても相沢さん、きれいになったね」

「ほんとに？ありがとうございます」

「結婚はしてないの？」

「それがまだなの…そろそろやばいよね」

「いやあ、相沢さんならいくらでも相手いるでしょ？」

「そんなことないよ。去年、麻衣子も結婚したしさあ」

「麻衣子？ああ、牧村さんのことだね」

「そう。みんなどんどん結婚していくよね」

「そうだね。村上はまだだね」

「そうなんだ。たけし君は？」

「俺もまだ…。まあいろいろあってね」

「ふ〜ん。村上君とはよく会ってるの？」

「たまにね。二ヶ月に一回くらいかな」

「そうなんだ」

たわいない世間話。しかしたけしは少し違和感を感じていた。相沢はたけしを下の名前で呼んでいるが、昔そんな風に呼ばれていただろうか？

しかしそんなことはどうでもよかった。きれいになった相沢と会えたのがうれしかったからだ。

「ね、何か頼んだら？」

「う〜ん、けど家でメシ食ってきたからなあ」

「じゃあ、デザートとか？」

見ると相沢は、ケーキとコーヒーをすでに注文していた。

「そうだね。じゃあ俺も同じもの注文しようかな」

たけしは同じくケーキとコーヒーを注文し、美味しくいただいていた。

「それで、同窓会いつなの？」

「え？えとね…」

相沢は少し言葉に詰まったが、やがて話し出した。

「ごめん、たけし君。同窓会っていうのは…嘘なの」

「え？？」

「…」

相沢は申し訳なさそうな顔をしていた。

「えと…そうなんだ…ま、まあいいけどさ…」

「ごめんね」

眉をひそめつつも、笑顔で手を合わす相沢。たけしはかわいいと思っただ。

「え？でも、じゃあ用はなんなのかな？」

たけしは少しだけ期待した。

「実はね…」

相沢は、かばんからある資料数枚と、小さな洗剤のようなものを取りだした。

「ねえ、たけしくん、ワールドプレミアムって知ってる？」

「ワールドプレミアム？」

たけしは嫌な予感がした。

「あのね、洗剤とか、文房具とか、お菓子とか、いろいろ取り扱ってるんだけど」

「…」

「知り合いに口コミで商品売る形式の会社なの」

（なんだよ…マルチの勧誘かよ…）

「まず会員になって、基本のセットを買うの。そして、友達に紹介して、会員を増やせば、その友達を買った商品の売り上げの何パーセントかがもらえるって方式なの」

「へ、へえ…」

たけしはとりあえずマルチ商法を知らないふりをした。

「そのパーセンテージは、会員を増やせば増やすほど増えていくわ。もちろん商品を個人的に買ってでもいいのよ」

「…」

「この商品は質もいいし、とにかく安い。ほら、テレビCMなんかでやってる商品って高いでしょ？あれはね、広告費なんかが多い」としてのっかってるからなんだよ」

「ふ〜ん…」（そんなこと知ってるよ、ったく…）

「この洗剤もね、すごくいいのよ。手に優しいし、油污れもよく落

ちるし」

「食器洗いか何かかな？」

「うん、そう。スーパーで売ってるのより、断然いいわよ」

「…」

「一応さ、カタログも持ってきたから…」

その時、

「お待たせいたしました」

ウエイトレスがケーキとコーヒーを持ってきた。

「ありがとう」

ウエイトレスは去っていった。

「えっと、カタログは…あった」

相沢はカタログを取り出した。

「一部なんだけど、これがカタログ」

「さっき出した資料みたいなのは？」

「あ、これは会社の説明と、会員の申込書だよ」

(おいおい、申込書？いま入会させる気か？)

「ほら、いろいろあるでしょ？どれもいいものばかりで…」

その時、耐え切れなくなったたけしは立ち上がった。

「ごめん、相沢さん。そういうことなら、俺は帰るよ」

「え？」

「マルチの勧誘は何度も受けたけど、全部ことわってきたんだ」

「マルチ…？」

「そつだよ。マルチ商法だよ、これは」

「…」

「俺の知る限り、マルチで儲けるのは無理だ。だから悪いけど帰る

よ」

「…」

その時、となりの席の女性が、いきなりこちらに来た。

「すみません…」

たけしは驚いた。



数日が過ぎたある日の夜。

「ふう。なんだかな。せっかくきれいになった相沢さんに会えたのになあ。村上はマルチに誘われなかったのかな？今度聞いてみよう」

たけしは風呂に入ろうとした。しかしその時、

”ピ。ピ。ピ。ピ。”

携帯が鳴った。

「もしもし」

「あ、たけしさん？覚えてるかなあ…まなぶだよ。まえにコンビニで会った」

「おお、まなぶ君。久しぶり」

「あのさ、前に女の子紹介してくれって言ってたじゃん？」

「ああ」

「一応、紹介できる子、ひとりいるんだけど…」

「ほんとに!？」

たけしは驚いた。まさか本当に紹介してくれるとは思ってなかったのだ。

「うん。25歳の子なんだけど」

「25か、いいね。ぜひ紹介してくれよ」

「分かった。いつにする？」

「そうだな…今度の日曜日の夜とかどうかな？」

「日曜日か…俺は仕事で行けないけど、それでもいいかな？」

「そうか…まあいいよ。むこうがいいならね」

「オッケー。じゃあ聞いておくよ。んで、また明日電話するよ」

「分かった。ありがとう」

「じゃあね」

電話は切れた。

「25歳か…」

たけしは内心、うれしかった。気分が高揚したまま、たけしは風呂に入った。

風呂から出たたけしはビールを飲みつつ、くつろいでいた。その時、

”ピピピピピ”

また電話が鳴った。

「なんだ？今日はよく電話が鳴る日だな。もしもし」

「あ、もしもし…たけしさんですか？」

「はい、そうですけど…」

「あ、あの…ゆみです。先日、車で送ってもらった」

「おお、ゆみちゃん。元気？」

「はい。おかげさまで」

「それはよかった」

「あの…先日は本当にありがとうございました」

「いやいや」

「それで、恩返しにごちそうしたいと思っていて、今度の日曜日、ファストバーガーにでも行きませんか？」

「ファストバーガー？」

ファストバーガーとは、要するにマクドナルドのようなお店だ。

「はい。駅前の。私にはそのくらいしか出来ませんが…」

「うん。いいよ。それで十分だよ」

「じゃあ、お昼でいいですか？」

「昼か。うん、いいよ」

「じゃあ、今度の日曜日12時くらいにお店の前で待ってます」

「オッケー」

「じゃあ失礼します」

電話は切れた。

「…」

たけしはビールを一口飲んだ。

「なんだろう。ちょっと運が向いてきたのかな？いつも何の予定もなかったのに、今度の日曜日は忙しくなりそうだな」

たけしはうれしそうだった。その日のビールは、いつもより美味しく感じた。

世界が少しだけ明るくなった気がしていた。

日曜日。天気は晴れ。いや、快晴だ。たけしの心も快晴だった。

今日は若い女性に会える。しかも二人。

まあひとり女子高生なので、つきあうとかそういうのはないと思うが、それにしても、たけしの心はウキウキだった。

たけしは身だしなみを整え、心おどらせながら時間が来るのを待った。

「時間がなかなか過ぎないな……」

時間というのは待つと長い。楽しいときはあっという間なのに。

「掃除でもするか」

たけしは掃除を始めた。

「ふう、終わった」

しかし時間はほんの20分ほどしか経っていない。

「テレビでも見るか……」

しかし、こんなときに限って、面白い番組はやっていなかった。

その後も、ゲームをしたり、音楽を聴いたり、暇をつぶすたけし。そしてようやく約束の時間に近づいてきた。

「よし。そろそろ行こう」

たけしは鏡を見て、身だしなみをチェックし、車で出かけていった。

駅前。たけしは有料駐車場に車を止め、ファストバーガーのほうへと向かった。

「さてと……」

少しドキドキしながら歩くたけし。時間は12時を少し過ぎていた。

「あっ」

ゆみらしき人物が店の前にいた。ミニスカートだった。非常にかわいらしい格好だった。

「こんにちは」

「あつ、こんにちは、たけしさん」

「ごめんね。ちょっと遅れちゃったね」

「いえ、私も今きたところなんです」

「そっか。じゃあ、とりあえず入ろうか」

二人は店内に入った。昼時なので、さすがににぎわっている。

「じゃあ、たけしさん、遠慮なく選んでくださいね」

「ありがとうございます」

たけしはセットの商品を選んだ。ゆみもハンバーガーの種類は違うが、セットの商品を選んだ。

間もなくして出来上がり、二人は席に着いた。客は若い子が多いが、家族連れもけっこういた。

「では、いただきます」

「はい」

二人はハンバーガーを美味しくいただいた。

その後、小一時間ほど話をし、二人は店を出た。

「ゆみちゃん、ごちそうさま」

「いえいえ」

「さて…これからどうする？もう帰るかい？車があるから、よかつたら少しドライブでもどう？」

「そうですね…」

「用事があるなら、別にいいけど…」

「あ、あの…少し歩きますか？」

「歩く？」

「ほら、天気もいいし。向こうに公園があるから、そこまでお散歩でもどうかなって…」

「散歩か…うん、たまにはそういうのもいいね」

「ほんとですか？じゃあ」

なんとゆみはたけしと腕を組んできた。

「ちよつとゆみちゃん…」

たけしはもちろんうれしかったが、なんとなく気まずかった。

「ふふふ、ほら、いきましよう」

ゆみは笑顔だった。

「あ、ああ…」

たけしは困りつつも、本当はかなりうれしかった。

青空の下、腕を組んで歩く二人。しばらく歩いていると、公園が見えてきた。しかし公園の手前にはラブホテルがあった。

「…」

たけしは少し気まずかったが、ラブホテルは見えないふりをしていた。その時、突然ゆみが立ち止まった。

「ゆみちゃん？どうしたの？」

「あ、あの…」

「…？」

「あの…よかつたらここに入りませんか？」

「え？」

「あの…これくらいでいいですから…」

そう言つとゆみは指を三本差し出した。

「…！？」

それはおそらく三万円ということだろう。

「…」

ゆみはうつむいていた。

「…」

たけしは言葉が出なかった。

「あの…持ち合わせがないなら…あそこのコンビニで下ろせばいいし…」

ゆみはたけしと目を合わすことなく話した。

「はあ…」

たけしは組んできた腕を離した。

「ゆみちゃん…君みたいな子がそんなことするなんて…時代は変わったな」

「…」

「分かった」

そう言うと、たけしは三千円を渡し言った。

「これだけあればなんとかなるだろう？家に帰りな」

「…」

「ゆみちゃん、今後はそんなことしちや駄目だよ。好きでもない男と、たった三万円で寝るんじゃない。分かったね」

「…」

ゆみは黙っていた。

「じゃあ、俺は帰るよ」

たけしはその場を去った。

「…」

ゆみはただ立ち尽くした。

「嫌な世の中になったもんだな…」

たけしは帰り際、ポツリとつぶやいた。

「ま、いいや。今日のメインはまなぶ君の紹介だからな」  
たけしは気持ちを切り替え、足早に家に帰っていった。

その3へ続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8184k/>

---

恋愛しよう その2

2010年10月8日15時22分発行